Katherine Mansfield の「Pearl Button がさらわれた話」について

水　田　圭　子

Pearl Button という女の子が2人の太った女に連れ去られ，町から田舎へ馬車で行く。途中 Pearl は初めて海を見る。やがて海辺の家へ連れて行かれ，そこで海の面白さを例の女たちから教わり，海の水を手にすくうと青くなくなってしまうことに気付いて嬉しくなり，女の首に抱きついたりする。この幸福の絶頂は，町から追いかけてきた警官たちの姿に破られてしまう。これが1910年に作られた短編 "How Pearl Button Was Kidnapped" の荒筋である。

子供が女にさらわれるという話は，東洋の鬼子母神の話を連想させるが，Mansfield の短編に出る2人の浅黒い顔の女たちは，子供を不幸にする人たちではない。この女たちは何なのであろうか。彼女らは，太って大柄であること，洋服の色が「赤」と「黄と緑」であること以外は詳しく書かれていないが，彼女たちがシダを盛った亜麻の籠をもっていたとある。シダの語源的な意味は「羽」「翼」であり，女たちは軽やかな魂を象徴するようにも思われる。また，女たちの仲間である男たちの描写の時も「羽入りマット」を肩にかけていたという箇所が2度出てくる。男も女と同じ世界に属することを示している。また，Pearl が歩き疲れて胸に抱き上げられると良い匂いがするということや，馬車で今度は仲間の人たちと田舎へ行く時は，Pearl は女の膝に座ると，そこはベットよりも柔らかく猫のように暖かいという。人にぬくもりを与え，幸福感を与える，言わば豊かな女神のような人たちとして感じられる。Pearl は膝の上で女の首の回りの

緑の装飾品をおもちゃにして遊んでいる。自然の豊かな緑を象徴する色が使われている。女に指をキスされて，Pearl はこんなに幸福に感じたことは以前にはなかったと思う。2人の女は豊かな自然の女神，もしくはその精なのであろう。

この女たちの仲間の男たちも，Pearl に床の上を桃を弾じき玉のようにはじいてよこしたり，梨をひょこひょこ送ってよこしたり，ユーモアのある童心の人たちである。また Pearl の髪の美しさに他の女たちは感嘆の声をあげ，美しいものに素直に喜ぶ。ここの大人たちは町の秩序を重んじるしかつめらしい大人と違って目に曇りがない。町から田舎へ馬車で行く途中の野の描写は，丈の短い草のはえた野に羊が遊び，白い花の咲いた小さな灌木，ピンク色の野ばらの籠などである。平和で静かな満ち足りた喜びの自然の楽園を思わせる。先の桃や梨も豊かな自然の産物である。男たちも先の2人の女たちと等しく，自然の秩序に遊ぶ自然の子たちなのである。

Pearl が海というものに初めて接する時，最初は恐がっていたが，女たちが海の楽しさを教えることによって Pearl は恐さを忘れ，夢中になって砂をほったりする。「四角い箱の家」という子供らしい住みかから離れていてもそれを凌駕するだけの魅力がそこにはある。そもそも Pearl（真珠）は海の産である。子供の理想とする幸福な世界がそこにはあるといえる。そして，そこには，町に見るようないやなものがないのである。Pearl はここには何かいやなものがないのかと質問している。現実を知らぬ無邪気な世界，つまり童話の世界が描かれているといえる。赤・緑・黄・黒の色が，それぞれ，洋服・馬車・犬・小馬などの描写に使われているのは，子供の夢の想像の世界を表わすためである。子供の視点というおぼろな線により淡く描き出された絵本の世界である。この絵本の中の少女の，輝きに満ちた瞬間を無残にも壊すのは，秩序ある大人の世界の理解のなさである。

伝記的に言って，1910年は Mansfield が流産した翌年である。流産後，

彼女は自分の子供を失った悲しみを紛らわすため，Ida—別名は LM—の提案で，肋膜炎（pleurisy）上がりの8歳になる男の子 Walter を簡単な手続き後，静養先のヴェリスホーフェンに送ってもらって，その子供が丈夫になって戻れるまで2，3カ月面倒をみたという事実があった[1]。この伝記的事実を考えてこの作品を読んでみよう。Mansfield にはあの世に子供がさらわれた悲しさがあったろう。しかし同時にその可愛い子供はいま永遠の幸福の世界に遊んでいるのだから，この大人の現実の世界に連れ戻さない方がいいのかもしれないという反省もあったのであろう。この短編の結末がそれを語っているように思える。"Kidnap" とは普通，子供を不幸なところへ連れ去ることをいう。この短編の場合，主人公の子供は2人の女たちに「さらわれた」のであるが，それはこの子供を不幸にはしなかった。「青色の服の男たち」が現実の世界へとこの子供を連れ戻すことが彼女を不幸にするのである。"Kidnapped" とはその意味では「青色の服の男たち」の仕業なのである。

この短篇は，楽園に遊ぶ豊かな女神像ともいうべき女たちが，子供を理想郷へと誘う図なのであろう。作家として Mansfield は常にこういう想像（imagination）の世界に遊び，現実の世界にひきもどされることを嫌悪していたのであろう。自然の海の色は Pearl の手にくみ上げられると否定され青くなくなる。この直後に青い服の警官が追って来る姿が見える。この自然の青い世界は，町からやってきた矮小な（"little"）青い服を着た人たちの現実の世界によって壊されてしまう。だから海の水の色が常に「青」である童話と詩の世界，その「青」が否定されることのない境地を希っていたのであろう。つまり現実への Kidnapping をこばむのは Mansfield なのであろう。

（1）*Katherine Mansfield*: *The Memories of LM* (London: Michael Joseph, 1971), p. 52.